

平成 23 年度 日本大学地理学会秋季学術大会発表要旨

(平成 23 年 11 月 19・20 日開催, 於: 日本大学文理学部)

101 長野市善光寺門前町における宿坊経営の変化

難波高志 (院・前期)

善光寺の宿坊は、講組織の整備に伴い多くの参詣客を受け入れ発展してきたが、近年は講組織の減少、参詣スタイルの変化などの影響を受けて利用客が減少し、宿坊経営にも変化が生じている。そこで本報告では、宿坊経営の変化について考察した。その結果、①現在の宿坊地区は元禄時代に形成されたこと、②当時、参詣客の泊まる宿坊は持郡制度で地域割されていたこと、③宿泊利用客数は、大正 15 年・昭和 17 年・昭和 42 年にピークをもち、現在は減少傾向にあること、④衰退の原因としては、参詣客の個人旅行・個室志向があげられること、⑤宿坊の軒数は、最盛期の 45 軒から 39 軒に減少していること、⑥宿坊経営は家族労働力を中心とし、繁忙期には臨時雇用の労働力で補っていること、⑦近年は、新たに朝食・昼食の提供を加え、経営の維持を図っていることが明らかになった。

◆Key words: 宿坊, 経営形態の変化, 善光寺

102 埼玉県秩父市における祭礼の伝承にともなう住民組織の変質について

宇賀村芳太郎 (院・前期)

2007 年、文化庁の諮問機関である文化審議会によって、今後の文化財保護の指針として「歴史文化基本構想」が提言された。ここでは、「社会全体で文化財を継承していく」ことの必要性、文化財保護における地域社会の重要性が述べられている。一方、文化財の 1 つである祭礼について、高野 (2010) は、祭礼が「地域社会の社会的・経済的状況を反映する場合がある」と述べ、祭礼と地域社会に密接な関係があるとしている。そこで本報告では、地域社会の一側面として住民組織に

着目し、祭礼の伝承にともなう住民組織の変質について発表する。研究対象地域は、埼玉県西部に位置する秩父市である。対象地域では「祭りの宝庫」と言われるほど、一年を通じて多くの祭礼が行われている。ここでは、例年 12 月に秩父市街地において行われている「秩父夜祭」を取り上げる。

◆Key words: 住民組織, 祭礼, 秩父市

103 わが国における地方公共交通の現状と課題

上崎貴仁 (院・前期)

近年、地方都市においては、公共交通事業者の運行本数の減便や事業撤退が深刻化している。このような背景には、自家用車保有の一般化に伴うロードサイドショップの台頭や、中心市街地の都市機能の衰退が挙げられる。しかしながら、多くの事業者は陸運業に留まらず、流通・不動産など、その都市において重要な存在になっている。また、今後迎える超高齢社会や移動制約者への対応という点から考えると、公共交通機関および運行事業者の重要性というものは今後さらに増すものと考えられる。このような事をふまえて、本発表では、昨今の公共交通事業者の動向、各交通機関の特徴、収益の特性などを瞥見し、今後の公共交通機関の在り方について卑見を行いたい。調査の結果、地方旅客鉄道会社においては、拠点とする都市の規模や観光資源の有無などにより、輸送密度に大きな開きがあり、いくつかのパターンに分類できる事が明らかとなった。

◆Key words: 地方都市, 公共交通, 行政との連携

104 交通条件と交通規制を考慮した交通事故多発地域の設定に関する研究

山口恵輔(院・前期)

本研究は、従来の交通事故の研究に基づき、ミクロな視点での分析が必要であるとされている点から、交通事故多発地域を設定し交通条件や交通規制との関係を明らかにすることを目的とする。研究対象地域を世田谷区、杉並区とし、対象交通事故は事業用車の交通事故とする。年間交通事故発生件数は、環状7号線と環状8号線、その他の幹線道路が交差しているところで多く発生している。また交通事故発生件数を求めるだけでなく、地区ごとに道路距離に違いがあるため、各地区の道路総延長距離を求めたうえで、年間1kmあたりの事業用車の交通事故発生密度を求めた。その結果、年間交通事故発生件数とは異なった交通事故多発地域が設定された。これらの結果から、交通事故発生地点は、幹線道路発生型と路地発生型に分けられる。今後は、これらの発生型と道路幅員や交差点、道路の見通しとの関係を分析する。

◆Key words : GIS, 交通事故, 交通条件

105 本四架橋開通後における本四間トラック輸送ルートの変遷—香川県発便を事例に—

黒川量平(院・前期)

本州四国連絡橋の開通やETC割引の導入は、本四間を結ぶ人や物の流れに大きな影響をもたらした。しかし、これに関する系統のおよび、詳細かつ具体的な検討が十分になされてきたとは言えない。そこで本研究では、本四架橋の開通やETC割引の導入が香川県発のトラック輸送に与えた影響について考察した。その結果、①瀬戸大橋の開通で時間距離の短縮、ETC割引導入で交通費の軽減がみられたこと、②フェリーから各本四連絡橋への転換は、瀬戸大橋開通後に中讃地域で、明石海峡大橋開通後に中讃・東讃・高松市の各地域で、ETC割引導入後は西讃地域で進んだこと、③各本四連絡橋ルートへの転換は大手企業ほど早期からみられたこと、④生鮮食品等の輸送

は時間短縮、資材・加工食品等の輸送はコスト軽減志向が強いこと、⑤東讃・高松市・西讃・中讃の各地域間で選択ルートに地域的差異が生じていることなどが明らかになった。

◆Key words : 架橋効果, 貨物自動車輸送, 物流

106 長野県上諏訪地域における酒造業の成立・展開と立地条件

宮坂 諒(院・前期)

長野県上諏訪地域は日本を代表する酒造地域の一つである。そこで、本研究では上諏訪地域における酒造業の成立・展開について、立地条件に留意し考察した。松田(『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』, 1999年)は、酒造業の立地条件として水・米・技術を指摘したうえで、産地形成には杜氏の持つ技術の重要性について言及している。上諏訪における酒造業は、1552年の城下移転に伴う御前酒製造に始まり、良質な軟水の地下水、地元の米、農家の労働力、城下近隣の酒需要を立地条件として発達した。しかし、大正時代に技術や酒米の開発の遅れから他産地との競争に敗れたため、広島より技術導入を図り製品の品質向上に努めた結果、昭和初期には全国的な産地へと成長するに至った。現在、全国的な酒米や速醸系生産方式の普及で、米・技術条件の平準化をみるのが、当該地域では一律的な平準化を嫌い、より個々の技術特性を活用した銘柄化で存続を図る動きが顕著である。

◆Key words : 上諏訪, 酒造業, 立地条件

107 山形県金山町における景観施策とまちづくり

廣田 宗(院・前期)

近年、各地で地域振興の在り方が模索される中、地域資源を活かしたまちづくりが注目され、一つの潮流となりつつある。本発表では山形県金山町を取り上げ、同町が力を入れる景観施策の取り組み内容を整理し、基幹産業である林業との関

わりと現状における問題点について考察する。金山町では宝暦年間より林業が行われ、現在に至るまで町の基幹産業となっている。特に昨今は、景観施策に力を入れており、昭和58年から「街並みづくり100年運動」と銘打って、金山杉を使用し伝統的工法で建てられる「金山型住宅」による街並み景観の統一を図っている。現在、中心部における約4割の住宅が「金山型住宅」であるという。このことが地元における金山杉の木材需要を生み、地産地消が成立してきた。しかし、地元においても価格等の面から、新改築の際に大手ハウスメーカーを利用する例がみられる等、金山杉生産を取り巻く状況は厳しさを増していることから、森林資源の新たな利用方法が課題となっている。

◆ **Key words** : 金山町, 地域資源, 林業

108 報徳社の存続形態と今日的役割

笹本裕大(院・前期)

農村社会の維持・発展を目的とする結社は、社会構造や生活様式の変化のなかで淘汰される傾向にある。全国各地の農村を資金や土地管理の面から支えてきた報徳社もその数を減らしてきたが、今なお存続するものが少なからずある。そこで本研究では、存続している報徳社を事例に、その形態や今日的役割と存続の要因について明らかにする。現存する報徳社には、設立当時の目的として、①農業の振興に重きを置いたものと、②土地の維持、管理に重きを置いたものがあり、それが現在の存続形態に影響している。前者は地域の農業形態の変化にともなって活動の形態やその今日的役割に変化がみられる。一方、後者は土地の維持や管理を主目的としてきたため、今日においても目的を変化させる必要性が小さく、その形態や役割が大きく変化することなく存続している。ただし、その有する資産額や組織形態により地域社会に果たす役割には差異がみられる。

◆ **Key words** : 報徳社, 存続形態, 今日的役割

109 メガソーラーが地域社会にもたらす影響に関する研究—神奈川県川崎市を事例に—

藤田 要(院・前期)

1970年代のオイルショック以降、石油への依存低減、石油の代替で温室効果ガスを出さないエネルギーに対する重要性が増してきた。わが国では、特に太陽光発電による環境対策をさらに進めていく観点から、全国各地で大規模太陽光発電所(メガソーラー)の建設、運転開始が相次いで行われている。首都圏では、神奈川県川崎市で2011年度から東京電力の運営で2万kWの規模で運用開始を予定している。これらの事業はこれまで環境政策として行われてきたが、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、首都圏を中心とする管内で電力不足による大きな混乱が生じたため、メガソーラーは電力確保の観点でも大きな注目を浴びるようになってきている。以上を踏まえて、メガソーラーの運用が地域社会にどのような影響をもたらすかについて、運用の現状と課題を考察する。

◆ **Key words** : メガソーラー, 地域社会, 川崎市

110 感染症サーベイランスを用いた感染症流行地域の抽出—インフルエンザ感染症を事例に—

荒堀智彦(院・前期)

感染症の発生状況や動向を調査し、地域的要因を分析することは、疾病学だけでなく、疾病地理学においても学問的関心が高まっている。わが国では、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(通称:感染症法)」のもと、患者発生情報を調査・集計し、感染症の発生状況や動向を公開するシステムとして感染症サーベイランスがある。しかし、データを集計する組織や感染症の種類によって、空間スケールや年齢階級・性別などの属性情報が異なる。また、集計の報告も都道府県別に限定された報告に留まっており、詳細な流行集中地域の抽出や経年変化の分析はみ

られないのが現状である。そこで本研究では、近年データの整備・公開が進んでいるインフルエンザ感染症を事例に、基礎データに基づき感染症サーベイランスの類型化を行い、具体的に地域の流行の集中をみる。

◆ **Key words** : 感染症サーベイランス, インフルエンザ感染症, 流行地域

111 東京都世田谷区における動物病院の立地分析

石神亜沙子 (院・前期)

近年、高齢者のペット飼育やペット飼育の可能なマンションが増加し、ペットホテルやペット保険等のペットビジネスも多様化しつつある。内閣府が2010年に実施した『動物愛護に関する世論調査』のペット飼育者の割合は34.3%で、国民の約1/3はペットを飼育していると推測できる。また、医療技術の進歩や動物病院の増加によりペットも人間同様に長寿化の傾向がみられる。本発表では、東京都世田谷区を事例にペットの中で最も身近な犬の数に注目しその分布を考察するとともに、GISを用いて動物病院の立地特性を分析する。動物病院は、建築基準法により建築可能な地域が大きく制限されている中で、特に同区東部の駅から500m圏内に立地し、犬の登録件数の多い地域にある程度対応していた。また、犬の飼育を経済的な豊かさの指標と仮定して同区の所得税の納税額との関係を分析し、やや相関があることがわかった。

◆ **Key words** : 動物病院, 犬の登録件数, 立地分析

112 新潟県上越市の医療機関の立地分析

相羽良寿 (院・後期)

本研究では、地域医療ならびに病院経営の観点から、医療機関の最適な立地点をGISならびにデータ分析により探索し、継続的に医療サービスが行える立地点を求めることを目的とする。本研究で言う医療機関とは狭義において、医師や歯科

医師等が医療行為を行う場所をいう。本研究の研究対象地域は新潟県上越市、埼玉県さいたま市浦和区とし、本発表では医療機関を全診療科目で分析するのではなく、年齢層等を考慮して小児科を主とする医療機関にターゲットを絞り立地分析を行うものとする。また、今回の発表では新潟県上越市を中心に発表する。研究方法は、患者側（サービスを受ける側）の視点として患者受診情報（インターネットの利用）や医療機関への距離などを考慮する一方で、医療従事者（病院経営者）の視点では、病院・医院の経営的側面や医療サービスの階層（大病院・中病院・医院（住み分け））等を考慮する。この二点の視点を勘案して方法論を立案する。

◆ **Key words** : 医療機関, 空間情報, 地理情報システム

113 地図作製のデジタル化にともなう簡易GPSの可能性

赤沢正晃 (院・後期)

地理学の基礎資料となる地形図等に関わる「地理空間情報活用推進基本法」が2007年8月施行された。しかし、企業のほとんどは小規模経営で、デジタル化に対応した新たな機材導入と技術者養成のための資金的問題が内包されており、多くの企業にデジタル化が浸透していないのが実状である。そこで、簡易GPSによるDGPS観測が一部の測量に使用可能となったため、計測器としてどの程度の縮尺の地図に利用が可能となるかの限界を探る。これまでの検証で1/2,500地図に使用可能と考えられるデータを取得しているが、安定性に不安があった。そこで計測器本体を改良し、次に観測環境として天空に障害物がない河川敷公園と障害物がある樹林内の公園を選び、更に数値的な差を求めるために街区基準点のある道路上において繰り返し検証を行った。その結果、観測方法を注意することにより縮尺1/1,000に迫る精度と安定した線形を取得することができた。

◆ **Key words** : 法改正, デジタル地図, GPS

114 工業都市における産業再編について—川崎市を事例に—

吉田将史 (川崎商工会議所)

日本の製造業では、円高や海外との価格競争の影響等により、生産拠点を中国や東南アジアへ移転する企業が多くなった。日本各地の工業都市、企業城下町と言われる自治体では産業の空洞化が叫ばれるようになり、新たな産業構造の構築が求められるようになった。京浜工業地帯の中核を形成している川崎市でも同様であり、重厚長大型の工業施設が立地する臨海部では、メガソーラー(大規模太陽光発電所)等の優れた工業施設の立地、羽田空港の国際化の影響を含む新たな産業の誘致など、従来の臨海部の工業地帯からの変化が生じている。一方、内陸部では従来の生産拠点から研究開発拠点へと変貌し、新たな研究開発拠点の進出等により従来の工業都市としての特性から徐々に変化を遂げている。また、近年は産業観光など、これまでに見られなかった形で産業の活性化が行われている。以上をふまえ、本発表では、このような川崎市の産業の実態と取組みについて発表を行う。

◆ **Key words** : 川崎市, 京浜工業地帯, 再開発

115 公共施設へのネーミングライツ導入の実態と課題

畠山輝雄 (文理学部)

近年、地方自治体では、脆弱な財政状況から公共施設の管理・運営経費の捻出が困難となっているため、アメリカ合衆国で始まった施設名称を企業に売却するネーミングライツ(以下、NR)の導入が進んでいる。わが国では、2003年の東京スタジアム(味の素スタジアム)以降、2011年10月までに、のべ137の公共施設に導入されている。NRには、自治体の収入源確保や、企業の宣伝効果という双方へのメリットがあるため導入が進んだ一方、企業の不祥事による撤退や契約期間ごとの名称変更、地域住民とのコンセンサスの確保などの課題が生じている。そこで、本報告ではわが

国の公共施設へのNRの導入実態を把握し、地域における公共施設の管理・運営方策としての課題を明らかにする。わが国のNRは、欧米諸国に比べて短期間かつ少額での契約が多く、また施設の露出度も低いことから、企業の宣伝よりも地域貢献という目的が強いことが明らかとなった。

◆ **Key words** : 公共施設, ネーミングライツ, 地域貢献

121 鶴見川多目的遊水地の機能的特色

畑林大樹 (学部4年)

鶴見川は洪水の多い都市河川として有名である。そこで本研究では、鶴見川流域最大の治水施設である横浜市小机・鳥山地区の鶴見川多目的遊水地を対象地域に選定し、その諸機能について考察した。その結果、①元々、小机・鳥山地区には水田が広がり自然の遊水機能を果たしていたこと、②戦後、鶴見川流域では市街地化が急激に進み、洪水の被害が増大したこと、③鶴見川多目的遊水地は総合治水対策として洪水調整機能を向上させるため、昭和59年以降に整備が進められたこと、④平成16年の台風22号に伴う大雨では、約125万㎡の調整をし、洪水被害を軽減したこと、⑤平常時は、様々な施設が備わった「新横浜公園」として利用されており、各施設は水を貯めるためにピロティー方式にて建設されていること、⑥その代表的な施設の「日産スタジアム」は利用者が毎年100万人規模に及び、国際・全国レベルのスポーツ観戦の機会を提供していること等が判明した。

◆ **Key words** : 鶴見川多目的遊水地, 洪水調整, 日産スタジアム

122 食品小売店への近接性と問題地域の抽出

木村泰聡 (院・前期)

社会的弱者の食料品店への近接性に関する研究は、欧米において1990年代からフードデザート問題として注目され、地理学をはじめ多くの学問分野での調査・研究が進められている。しかし、

国内における研究事例は少なく、研究が始まったばかりである。日本における研究事例として、岩間ほか(2009)では水戸市を対象にGISを援用して、食料品店への近接性が悪く、さらに高齢者が多く居住している地区を定量的に設定した。そこで本研究では、埼玉県東松山市北部地域を事例に、生鮮食料品を扱う小売店への近接性の測定と、問題地域の抽出を行う。研究では、NTTのiタウンページから小売店の位置情報を参照し、現地調査により生鮮食料品を取り扱っている店舗を対象とした。次に、メッシュの中心点から最寄の店舗までの道路距離を測定し、近接性の悪い地域を抽出した。また、市内の循環バスのルートを考慮した場合の近接性についても分析を行った。

◆ **Key words** : 近接性, GIS, フードデザート

123 投票行動と社会・経済的地域特性の関連性に関する研究

山口修平(院・前期)

本発表では、第42回から第44回の千葉県における衆議院議員総選挙結果を対象として、投票行動と地域特性との相関について分析を行う。また、主成分分析に基づいた地域分類を行い、投票行動との関係を考察する。指標として、市区町村ごとに集計した各回の衆議院議員総選挙の各党の投票行動データについて、2000年および2005年のセンサスデータのうち人口、産業別就業者数、従業上の地位、就業時間を変数として用い、投票行動と地域属性との関連性について分析した。相関分析の結果、自由民主党は年齢別人口が投票行動に与える影響が最も強く、民主党と共産党では、産業別就業者数が最も投票行動に与える影響が強いことが明らかとなった。また、2000年から2005年にかけて、相関係数は低くなる傾向があることから、地域特性と支持政党との関係は弱まっていることが明らかとなった。

◆ **Key words** : 選挙地理学, 投票行動, 多変量解析

124 新宿区西新宿の超高層建築物における立体的機能分化

佐々木竜太(院・前期)

東京都心・副都心では、1960年代以降、高層化が進展し、都心空間を垂直方向へと急激に拡大させていった。しかしながら、地理学において立体的なとらえ方を試みた研究は非常に少ない。そこで、本発表では、超高層建築物の階層別利用状況から、立体的機能分化について用途別の立地数と床面積の2つを指標として考察した。立地数は、飲食店が、地下階で約51%、1階で約24%、2階に約22%立地し、低層階に立地する傾向がある。また、小売店も、地下階で約17%、1階に約20%、2階に約13%立地し、低層階に立地する傾向がある。医療施設を見ると、3階、4階でそれぞれ約15%、5階に約23%立地し、中層階に立地する傾向がある。床面積について見ると、地下階の駐車場は、施設数では16%しか占めていないが、床面積では70%以上を占める。また、地下階の施設数の半数以上を占めた飲食店は、床面積では16%しか占めていないことが明らかとなった。

◆ **Key words** : 超高層建築物, 立体的機能分化, 西新宿

125 上海市の再開発事業における居住者の移動

任海(院・後期)

高度経済発展に伴い新興国の中華人民共和国では、北京、上海、広州などの大都市圏が形成された。上海市や北京市をはじめ、中国の各大都市では、老朽化した住宅を取り壊し、その跡地に高層ビルが建設されている。それに伴い、都市中心区を追い出された住民が郊外の住宅へ移転することは、1990年代から始まり、現在に至るまで20年間継続している。上海市の場合、郊外では、高級別荘と都市中心区の再開発で家を失った住民の移転先となる一般マンションが建ち並んでおり、農業用地が「住宅地基地」になっている。一方、都市中心区では、再開発後の高層ビルと伝統的な里

弄(リロン)住宅が混在し、都市部の貧富の格差が拡大している。本発表は上海市の静安区にある大中里を研究対象として、上海市の中心市街地で行われた里弄住宅の再開発事業と、それによる都市内人口の居住者移動の実態を明らかにする。

◆ **Key words** : 上海市, 里弄(リロン)住宅, 再開発

126 沖縄県豊川地区における屋敷林の変遷に関する研究—聞き取り調査にみる住民意識の実態—

羽田麻美・藁谷哲也(文理学部)

沖縄における伝統的家屋では、台風に備えた防風対策として、主屋の周囲を屋敷林や石垣で囲ってきた。沖縄県本部町豊川地区は、現在もフクギでつくられた屋敷林が多く残る地域であるが、1970～2006年の空中写真、および2010年の現地調査から、屋敷林は減少傾向にあることがわかっている。1970年に屋敷林を所有していた家屋を追跡すると、1970～1989年にかけて2.4戸/年、1989～2010年では1.3戸/年の減少率であった。本研究では、これら屋敷林の衰退要因を明らかにするために、豊川地区の全261世帯中101世帯の住民から聞き取り調査をおこなった。調査を実施した101世帯中、62世帯(61%)が屋敷林を所有していたが、そのうち21%の世帯は、住宅の堅牢化や高齢化による手入れの大変さ、風通しの悪さにより、屋敷林は不要だと考えていた。本地域における屋敷林の減少傾向は、その存在意義の低下によって今後も継続していくことが推測された。

◆ **Key words** : 沖縄県, 屋敷林, 集落景観

127 今帰仁村謝名区における「豊年祭」の地域社会存続に果たす役割

落合康浩(文理学部)

沖縄県北部の本部半島東側を占める今帰仁村は、19の字(区)からなっており、それぞれに沖縄独特の祭礼、伝統行事が継承されている。本研

究は謝名区における豊年祭を事例に地域住民の行事に対する関与の実態を調査することで、地域社会の特色を分析するとともに、こうした行事が地域社会の存続に果たす役割について考察することを目的とする。5年マールで(4年おきに)行われる謝名区の豊年祭は、「アヤーチ獅子」(県無形民俗文化財)や伝統の踊りが披露される地区最大の催事である。数か月前から始まる準備から9月の開催当日に至るまで、老若男女の住民大半が様々な形で運営に関わっている。そこには「ゆいまーる」の精神が生きており、運営に関わる一連の作業を協同で行うことが住民相互の連携を強めることになる。また、行事に参加することで人々は、自身も地区の伝統継承の役割を担う構成員であることを自覚し、地区への帰属意識を深めている。

◆ **Key words** : 今帰仁村, 伝統行事, 地域社会

128 東京郊外に居住する高齢者の日帰り観光圏分析—東京都八王子市を対象に—

藤井 太(院・前期)

「観光は21世紀の基幹産業の一つ」と長年に渡り言われ、2009年に観光庁が発表した旅行消費額(確定値)が25.5兆円と算出されるなど、産業観光は大きなマーケットとなっている。一方、観光研究は主に宿泊客や入り込み客を対象にしたものが多く、近年「安近短」と言われる身近な観光が好まれている現状に必ずしも即していないと考えた。以上を踏まえ本研究では、他の世代に比べ比較的自由時間が多くあり、日帰り観光を選択する傾向がある高齢者を対象とし、①観光産業の重要なものである高齢者の観光に対する目的意識や行動パターンの実態把握、②出発地から目的地までの移動距離・時間によって日帰り観光が高齢者におよぼす影響について考察することを目的とした。また、本研究では東京郊外に位置し、多様な住居歴や交通環境等の属性があると考えられる八王子市を対象に、市内保健福祉施設・集会施設でアンケート調査を行い、結果を分析・考察した。

◆ **Key words** : 日帰り観光圏, 観光目的, 高齢化

129 首都圏における日帰り観光の実態—神奈川県藤沢市江の島の事例—

中岡裕章 (院・前期)

わが国の国内旅行者数は増加傾向にある。その要因として、日帰り観光を行う旅行者数が増加していることがあげられる。背景には、鉄道などの公共交通機関や道路などの整備が進み、居住地から観光地へのアクセスが容易になったことや、近年の国内の不況から、時間的、経済的に宿泊観光にかかる余裕がないことを理由に、時間もそれほどかからず安価な日帰り観光の人気の高いことが考えられる。特に、首都圏は公共交通機関が充実しているため、日帰り観光を行う観光客の数は増加している。そこで本研究の対象地は、首都圏における日帰り観光の実態を明らかにするため、近年観光客数が増加し、年間1千万人以上が訪れている江の島とした。研究の目的は、日帰り観光地における観光客受け入れの実態と、観光客の志向や観光実態を調査し、日帰り観光客の増加要因や、日帰り観光地の成立条件について、観光地および観光客の双方の関係性から明らかにする。

◆ **Key words** : 日帰り観光, リピート率, 神奈川県藤沢市江の島

130 日本における国立公園の現状および課題

加藤幸真 (院・後期)

近年の自然環境の悪化に伴い、マスメディアを中心に環境保護に関する報道が多くなされ、国民の環境に対する意識は年々高まってきている。国立公園については昨年閣議決定された生物多様性国家戦略に国立公園が取り上げられた。また、今年3月の東日本大震災を受けて環境省は、被災地を国立公園として復興を目指すなど、国立公園を再考する時期に来ていることは間違いない。しかし、日本では国立公園についてマクロな視点から捉えた研究は少なく、先行研究の多くは特定の時期、場所に限定されたものがほとんどである。そこで本報告は、国立公園の現状と今日的な課題を明らかにすることで、今後の国立公園研究の基礎

資料としたい。

◆ **Key words** : 国立公園, 今日的課題, 日本

131 東京の都心周辺地域における土地利用の実態と変化—新宿区四谷地区の事例—

牛垣雄矢 (文理学部)

四谷地区は、近世から第二次世界大戦後にかけて、周辺住民へ物資を供給する最寄商業地であった。2006年までに建物の中高層化が進行すると、地価の高騰で既存の最寄店は減少し、オフィスやオフィス従業者向けの飲食店およびサービス業が増加した。商業地の性格がオフィス化に伴い変化したといえる。四谷地区におけるオフィス街化は、雑居ビルに小規模な事業所サービス業が立地することで進行した。ただし、主要な業種や従業者規模が短期間で変化するなど、オフィス街としての性格は安定していない。オフィス街化しても、あくまで都心周辺地域的なオフィス街といえる。最も集積の著しい専門サービス業(法律事務所等)は近年に増加の著しい業種で、東京中心部における他の集積地も小規模な事務所で構成されている。四谷地区は、狭小な雑居ビルで構成される都心周辺地域的な地理的条件の中で、時代の変化に伴う影響をみせている。

◆ **Key words** : 土地利用, 都心周辺地域, 四谷地区

132 農産物産地のリスクマネジメントと地域特性—法制度の運用に関わる予備的考察—

両角政彦 (文理学部)

農業は生産物の価格変動や業者間の競争、自然災害などの不確実性をともなう産業であり、リスクマネジメントやナレッジマネジメントが経営の維持・発展に向けた鍵になっている。本研究では、家族農業経営と産地組織存立のためのリスクマネジメントを想定した法制度や広義の市場と競争業者に関わる地域特性について、地理学による予備的考察を行うことを目的とする。研究手法として、Olson (2010) のリスクマネジメント戦略

の視点を援用し、産地の実態把握を試みる。農業経営費に着目し、各費目に相当する法制度、市場、競争業者を抽出すると、多数のリスクが想定され、各々に関連する主要なマネジメントの対象が明確になった。法制度の運用では産地内組織の紐帯が、市場再編・価格変動では経営規模と地域間ネットワークが、競争業者との取引関係では立地や近接性が関わり、各地域に適合したリスクマネジメントとその一般化の必要性が改めて示唆された。

◆ **Key words** : リスクマネジメント, 法制度, 地域特性

133 パキスタン北部地域ゴジャール地区フセイニ村の牧畜—停滞から衰退—

水嶋一雄 (文理学部)

インダス川支流フンザ川渓谷に居住するワヒ民族は、過酷な自然環境の中で伝統的な農牧業に依存して民族の社会・経済構造をしてきた。20世紀後半とくにカラコラム・ハイウエー (KKHとする) の供用後、この地域にも近代化や商品・貨幣経済の波が浸透したため、自給自足基盤が変質し、村の持続性が問題となっている。ワヒ民族のフセイニ村も例外ではない。変化の一つが麦類の栽培から換金作物の導入であり、今一つが牧畜の停滞と衰退である。ワヒ民族の伝統的牧畜は冬季と夏季で飼養場所を変える移牧で、年間降水量約350mm程度では羊や山羊の餌場の夏牧場が重要である。フセイニ村も村から約25km離れるパツラ氷河中流域右岸に5か所の夏牧場を持つ。報告では5か所の夏牧場の調査内容を基に村の牧畜が停滞から衰退しつつあることを明らかにする。

◆ **Key words** : 夏牧場, パツラ氷河中流域, パキスタン

134 最新鋭機 (B787 型) の就航と航空機産業の動向

永野征男 (文理学部)

ワシントン州 (USA) のボーイング社で組み立てられた B-787 型機は、本年 10 月上旬に世界初フライトとして成田へ飛来した。現在、世界の航空機産業は、EU グループのエアバス社と、合衆国のボーイング社に二分され、両社の開発目標は大きく異なっている。しかし、共通点としては販路の拡大 (受注量) に集約される。一方、わが国の航空各社は、今回の B-787 型購入の最大顧客であり、その生産段階から多くの国内航空機メーカーが素材や技術の面で主要な役割を担っている。本報告では、新鋭機最終組み立て工場が立地する、シアトル都市圏内のエベレット市 (WA) を中心として、就航までの経緯を分析する。

◆ **Key words** : B787 型機, 航空機産業, エベレット市

201 旧安曇川町におけるやな漁と扇骨業の展開

吉岡卓哉・藤田尊之・築瀬俊平 (学部2年)

安曇川は琵琶湖最大の流入河川であり、古くからやな漁が行われてきたほか、治水対策として植林された竹を用いた扇骨業を地場産業として育んできた。そこで本報告では安曇川地区におけるやな漁と扇骨業の展開とその課題について考察した。その結果、①やな漁は約1,000年の歴史を持つこと、②漁業の中心をなす北舟木集落は、賀茂神社の御厨として発展したこと、③現在のカットリやなは稚あゆを採捕するために20世紀に入って考案されたこと、④現在やな漁による収入は減収し、副業を行いつつ、後継者不足を抱えながらの経営になっていること、⑤また、扇骨は江戸時代に起源をもつこと、⑥工程は24にも及ぶこと、⑦技術習得には数十年かかること、⑧1960年代の扇風機の普及以降、衰退傾向になっていること、⑨国内産材料は竹枯れによって減少し、現在は中国産が中心となっていること、⑩後継者不足が機械化と扇骨業の衰退を引き起こしていること

等が判明した。

◆ **Key words** : 安曇川, 扇骨業, やな漁

202 琵琶湖におけるニゴロブナの生態・漁獲と利用の特色

飯野耀平・石井ちひろ・井田琢麻・亀田龍也・鈴木大智 (学部2年)

日本最大の湖である琵琶湖には、多くの固有種が生息している。特にニゴロブナは、古くから人々の生活と深くかかわっている魚種と言えるが、近年の土地開発や外来魚等の影響により生態系が危ぶまれている。そのことから、本研究ではニゴロブナの生態・漁獲とその利用の特色について考察した。その結果、①ニゴロブナは内湖や水田を産卵の場とし、琵琶湖の澄んだ水を好み生息していること、②北湖の漁港や内湖で漁獲されているが、その漁獲量は年々減少傾向にあること、③減少の要因としては、生息域の重なる外来魚による稚魚の捕食が指摘されること、④ニゴロブナの減少は、伝統的発酵食品であるふなずしの製造に悪影響を及ぼしていること、⑤そこで、自治体や地域のボランティアがブラックバスやブルーギル等の外来魚駆除とともに、ニゴロブナの稚魚の放流を実施していること等が明らかになった。

◆ **Key words** : 琵琶湖, ニゴロブナ, 外来魚

203 松本市における城下町区画の変遷

飯田琢哉・巢籠健太・佐崎玄樹・増田 渡・村山潤弥 (学部2年)

松本城は、1504年に前身の深志城が現在地に築城されたのが起源である。1582年に松本城と改められて、本格的な城下町の町割りが始まり、18世紀初期までに完成している。本研究では、江戸と明治時代の城下町、町割り・土地割りに関する資料を収集し、現地で確認した現代の土地割りと比較することで、城下町の区画が現代都市の区画にどのように反映されているかを検証する。かつて三の丸や松本城の東部、北部に広がっていた武家地は、現在、ほとんどが住宅地化しているもの

の土地割りは残存しているところも多い。松本城の北部の徒士町には、17世紀前半から1721年の間に建てられたとされる長野県内で最も古い武家屋敷も現存している。町人地は、松本城の東部が宿場町として、南部の東側が職人町、西側が商人町として賑わっていたという。これらの町割りや土地割りはほとんど変化しておらず、縦横に細く伸びる町割りや短冊形の土地割りが、現代にも受け継がれている。

◆ **Key words** : 城下町, 土地割り, 変遷

204 松本市における伝統工芸品生産と技能継承の実態

古庄和紀・佐々木貴弘・武田康子・松浦由莉・鈴木七瀬 (学部2年)

松本市の伝統産業では木材などを使用する工芸品が有名である。本研究では、それらの中から指物の伝統技術で製作される松本家具、木曾漆器の流れを汲む松本漆器、農業の休閑期に竹を編んで作るみすず細工の三種類に焦点を当て、各々の生産の実態やそれぞれが抱える諸問題について明らかにするため、職人や店舗に対する聞き取り調査を行った。松本家具は現在に至るまで一定の需要があり、それに応じた製作が技能継承につながっている。一方漆器、みすず細工は、いずれも高度経済成長期以降、安価な代替品が大量生産されるようになった事で需要が減少し、経営が悪化した。加えて松本漆器は徒弟制度が廃止され生産過程が変化した事で、またみすず細工は職人がいなくなった事によって、それぞれ後継者を育てる環境が厳しくなっており、技能継承が危ぶまれている。

◆ **Key words** : 伝統工芸品, 後継者問題, 技能継承

205 松本市における漬物産業の現状と問題

岩井美樹・大塚晴美・大道一樹・鯨井あずさ・小山拓馬 (学部2年)

松本市は盆地にあるため、夏季と冬季の寒暖差

が著しい。そのため古くから保存食としての漬物が食の中で重要な地位を占めており、現在では地場産業の一つとして発展している。そこで本研究では、松本市における漬物産業の特徴を明らかにするため、製造・販売業者に対する聞き取り等の調査を行った。市内中心部にある店舗は松本市内に製造所を持っているため、取扱商品は自社製品が中心であるが、駅構内にある店舗は市外や県外産のものも多く販売している。取扱商品にみられるこの違いは、顧客層の違いによるものである。前者が観光客と地元住民双方を対象とし、消費者のニーズに合わせて受注生産も行っているのに対し、後者は主として一見の観光客を対象としているためである。松本市において漬物は、観光資源の一つとして位置付けられるが、松本市内の産品にこだわり地産地消を推進したい行政と一部の販売者の意向には隔たりもあるようである。

◆ **Key words** : 漬物産業, 地産地消, 観光資源

206 松本市における中心市街地の現状

石井和也・石沢 仁・田中聖恵・野田哲郎 (学部2年)

松本市の中心市街地の面積は190haと広く、平成19年度現在の年間商品販売額は市全体の約3,239億円うちの548億円と多くなっており、店舗数は877となっている。本研究では比較的魅力ある地方都市として知られるこの松本市の現状を明らかにする。現地では17ある商店街の754店舗について調査を行った。各商店街にはそれぞれ異なる性格があり、例えば中町商店街、ナワテ商店街など景観や街並みを整備して観光客を誘致する商店街や、駅前通り商店街、伊勢町商店街など生活に密着した店舗が立ち並び市民が多く集う商店街がある。一部には、人通りが少なく暗い印象を受ける商店街もあるが、全体的には空き店舗が少なく、賑わいの感じられる商店街が多い。また一般的に地方都市の衰退要因として挙げられる大型店も、松本市では既存商店街と対立関係になく、相互に協力しあうことにより街づくりに取り

組んでいる点特徴的である。

◆ **Key words** : 中心市街地, 商店街, 大型店

207 松本市における景観の実態とその特色について

落合優気・青木佑介・三枝達也・佐藤泰章・諸木広隆 (学部2年)

本研究では松本市における景観保存の現状や問題点、今後の課題等を明らかにすることを目的とする。調査では、市役所の担当者や各商店主に景観保存に対する取り組みと方針について聞き取り調査を行うとともに、景観の状態を画像として記録し、それらにもとづいて問題点を整理した。松本市の市街地は城下町の土地割にもとづいて形成されてきたが、昭和40年代から50年代にかけて駅前を中心に再開発が進められ大型店が出店するなど、城下町の景観を失ってしまった。そうした状況の中で観光客の減少を危惧した商店街や行政が条例や独自の街並み保存評議会を設置し、市街地の景観保存に取り組んできた。現在、松本市において景観保存対策のハード面はほぼ完了しており、ソフト面の景観対策に移行しつつある。しかし、施策などの詳細においては行政、商店街、住民の間に認識の差も見られた。

◆ **Key words** : 街並み保存, 景観, 条例

208 松本市における湧水の利活用と整備事業について

久保野智子・小倉匡人・小谷郁恵・千葉翔太・浜口知子 (学部2年)

松本市の中心部は豊富な地下水に恵まれており、水辺環境整備によるまちづくりを推進している。本研究では、「平成の名水百選」に選ばれた「まつもと城下町湧水群」を対象とし、生活や産業における井戸・湧水の利用状況や水辺環境の保全・整備事業の実態について調査を行った。松本市街地は女鳥羽川・薄川の複合扇状地の扇端部に位置しており、巨大な湧水群を形成している。これらは市民の水汲み場としての役割を果たしてい

るほか、生活用水や酒造業・飲食店における用水としても利用されている。また松本市は「水めぐりの井戸整備事業」を進めており、13か所の公共の井戸を市街地に整備した。これらは分散して配置されているため、歩くことが楽しい街を演出し人々の回遊性を高めている。さらに水めぐりを表に出した観光PRも行われ、松本市の重要な観光資源の一つとなっている。しかしながら来訪者の増加によって井戸利用のマナーの悪化などが問題になっている。

◆ **Key words** : まつもと城下町湧水群, 複合扇状地, 水めぐりの井戸整備事業

209 海洋深層水による地域活性化の実態—入善町海洋深層水施設を事例に—

浦田裕貴・佐川広大・長田理志 (学部2年)

地方経済が停滞する中で、地域の活性化のあり方が大きな課題となっている。研究対象地域である黒部川扇状地右岸の富山県入善町は、これまで主として第2次産業の誘致に力を注いできたが、新たな地域活性化策を検討してきた。その一つに入善町で2001年に建設された海洋深層水施設がある。本報告は、海洋深層水の活用の実態と課題を調査したものである。この施設は海洋深層水を利用した地域経済の活性化を目的に建設され、2011年で10年を経過した。この10年間に於いて、海洋深層水を利用して、アワビ養殖と第2次産業との連携を多段利用により実施し一定の成果をあげてきたが、大きな課題も指摘されている。それは、全国的な認知度の低さ、さらに現地住民にも十分に知れ渡っていないという点である。この結果、赤字状態が継続し、目的とした地域活性化につながっていないのが現状である。

◆ **Key words** : 海洋深層水, アワビ養殖, 富山県入善町

210 黒部川扇状地におけるフィールドミュージアム(水博物館)の現状と課題

小野寺剛・竹内直之・峰岸知史 (学部2年)

1999年に食料・農業・農村基本法が制定されたが、その中で重視されたのが農山村地域の多面的機能の重要性であった。農山村地域の持続的発展は、この多面的機能の保全と利用を考慮するという視点である。このような時代背景の中で、富山県黒部川扇状地では、豊かな水資源を活用し、博物館というハコモノを建設するのではなく、扇状地全体を博物館とするフィールドミュージアム構想を立ち上げた。本報告では、2001年に具体的な活動としてスタートしたフィールドミュージアムの取り組みや現状、課題を明らかにする。現地調査では、フィールドミュージアムは環境を考える場、地域づくりの場、観光の場として水博物館を活用している事が明らかになった。しかしこの構想の基本がこれからの水と暮らしの持続的な発展であるとする、行政間の足並みがそろっていないことや、構想を具体的にどう実現していくかといったことなど、多くの課題が生じている。

◆ **Key words** : 黒部川扇状地, フィールドミュージアム(水博物館), 環境保全

211 地方都市における商業機能の停滞—富山県入善町を事例に—

樋下田明弘・米山泰永 (学部2年)・粒良桂太 (学部4年)

今日、地方都市における中心商業地域では、地域経済の停滞に伴う商業機能の低下が問題となっている。低下の要因としては、モータリゼーションに伴う中心市街地の空洞化や、若年層の流出や高齢化、郊外への大型ショッピングセンターの進出などが挙げられる。富山県入善町の駅前商店街も例外ではない。特に郊外型ショッピングモールの立地に伴う駅前商店街の経営不振や、商店の後継者不足が商店街の衰退に拍車をかけた。これらの問題を解決するために入善町では様々な事業を展開し、商店街の活性化に努めている。近年で

はラーメン祭りなどのイベントの開催、また、駅前
の道路や駐車スペースなどの基盤整備、空き店
舗への起業支援事業などを積極的に推進し、消費
者回帰を促しながら地域活性化に努めている。報
告では入善町の駅前商店街で聞き取り調査を実施
し、さらに統計データを分析しながら商店街の実
態や活性化の取り組みを明らかにする。

◆ **Key words** : 駅前商店街, 空洞化, 地域活性
化事業

212 農村地域における高齢化の実態—富山県入 善町今江地区を事例に—

川田拓人・松本直輝・諸岡宏昭(学部2年)

近年、日本の農村地域では、高齢化の進行が顕
著である。この高齢化は農業経営を持続的に発展
させるための大きな障害となっている。入善町の
人口は27,201人(2010年)で、この内65歳以上
の人口は全体の約30%の7,700人である。ところ
が、高齢化の状況は入善町の中でも地域的差異が
みられる。現地調査を実施した入善町今江地区
は、町の中心から約5km離れた舟見台地上に立
地する平地農業地域で農業を主業としている。今
江地区の高齢化の実態を理解するため、現地では
各家に、家族構成・性別・年齢などの聞き取り調
査を実施した。現地調査から、独居老人の世帯は
2戸、空き家は11戸、という結果が明らかになっ
た。独居老人の世帯数は少ないものの、農業従事
者の高齢化や後継者の不在が目立ち、農業経営を
続けることが難しい世帯が多い。また、富山市を
中心とする都市部への労働人口の流出が多い実態
が明らかになった。

◆ **Key words** : 高齢化, 後継者, 入善町今江地
区

213 水稲作農業の省力化に関わる「ハイテク入 善」について—ラジコンヘリコプターによ る薬剤散布—

喜多村知輝・近藤里紗・瀧口美月(学部2年)

近年、日本の農山村地域では農業の担い手不足

と高齢化の問題が顕著になっている。このことか
ら機械による農作業の省力化が重要となっている。
研究対象地域の入善町では、ラジコンヘリコ
プターを導入し、農薬散布における省力化を実施
している。研究では、入善町が「ハイテク入善」
という法人を作りラジコンヘリコプターを利用し
た薬剤散布を行っているため、その実績と実態を
調査した。これまで農薬散布は各農家の重要な農
作業として、小型の動粉機を利用しホースで散布
していたが、農作業の厳しさと農業従事者の高齢
化は、ラジコンヘリコプターによる薬剤散布へと
変化させた。ハイテク入善は若い担い手の農業に
対する関心を高めるために組織されたが、脱農家
や農業従業者の流出が継続している状況から、ラ
ジコンヘリコプターを利用している農家数は年々
増加し、散布面積も増えているということが明らか
になった。

◆ **Key words** : ハイテク入善, ラジコンヘリコ
プター, 黒部川扇状地

214 農業を基軸とした地域産業複合体の形成と 展開—新潟県上越市吉川区の清酒供給体系 を事例に—

柴原智視(院・前期)

近年わが国では、都市地域と農山村地域におい
て一層の経済格差が見られ、従来にも増して農山
村地域経済の底上げが必要とされている。このこ
とを踏まえ、農山村地域では農業を基軸とした地
域産業複合体の形成が必要とされている。新潟県
上越市吉川区は、酒米生産に特化した地区であ
る。同区の道の駅に立地する酒造会社Y社は、地
元の酒米生産者と契約栽培という提携関係を結
び、清酒を地域経済発展のための資源として利用
している。本研究では、吉川区における酒米生産
を中心とした地域産業複合体の形成と展開を明ら
かにすることで、酒米生産者と酒造会社の相互関
係や、それが地域の経済活動に与える影響につい
て考察することを目的とする。酒米生産者とY社
は、提携によって地域産業複合体を形成してい

る。しかし、提携の範囲が極めて限定的であることや、清酒売上高の停滞など、目的とする地域経済の発展には結びついていないことが明らかになった。

◆ **Key words** : 地域産業複合体, 清酒供給体系, 新潟県上越市吉川区

215 圃場整備事業の展開と地域農業の変容—上越市三和区の事例—

清水和明 (院・後期)

本報告では、近年、大規模圃場整備事業が実施されている上越市三和区を対象に、同事業の展開過程と地域農業に与えた影響を考察する。水稲単作地域である上越市三和区では、1980年代まで圃場一区画当たり10aから15aの小規模圃場に条件づけられた農業経営がおこなわれていたが、1994年から県営経営体育成基盤整備事業(大区画圃場整備)が区内8地区を対象に開始されたことで地域の農業構造は変化する。同事業は、圃場1区画当たりの平均面積を50aとして、受益面積の約4分の1を1ha圃場に造成することを目標としており、事業実施地域では、営農意欲の高い農家が農地の賃貸借契約を結ぶことで農地の集積と経営規模の拡大を図っている。さらに、近年では農業政策への対応の観点から集落営農組織の設立が進んでおり、こうした組織が圃場整備の実施地域における農地の維持管理を担っている。

◆ **Key words** : 圃場整備事業, 大規模経営農家, 集落営農組織

221 西ヨーロッパの世界遺産地域における観光実態

石井ちひろ・小倉匡人・片山美穂・
笹谷直人 (学部2年)

多田和正・道関明奈・三木彩央 (学部1年)

近年、世界文化遺産を資源とした観光が世界的に多く行なわれ、特にフランスやドイツなどの西ヨーロッパ諸国において顕著にみられる。そこで、西ヨーロッパ諸国の世界遺産地域における観

光実態をリューバック、ヴェルツブルク、キンデルダイク=エルスハウトの風車網、モン・サン・ミシェル、パリのセヌ河岸を事例に明らかにする。研究方法は、地図やパンフレットなどの受け入れ側の実態把握および観光客へのアンケート調査である。これらの世界遺産地域では、世界各国から来る観光客のために、近隣諸国の言語や主要国の言語を使用した看板や地図、パンフレットなどが整備されていた。また、お土産については、日本のようにお菓子などの食べ物を中心ではなく、民芸品などの形が残るお土産の方が多かった。そして、世界遺産登録後の観光客増加による経済効果の一方で、建造物への落書きやゴミの放置などの観光マナーに関する課題も生じていることがわかった。

◆ **Key words** : 世界遺産, お土産, 観光マナー

222 ドイツにおける交通政策の現状と課題—カールスルーエ市を中心に—

牧田 悠・大久保勇樹・大隈 茜・
亀田龍也 (学部2年)・
白木優里・須田萌子 (学部1年)

近年、地球温暖化問題の深刻化により各国で環境政策が重視されている中、欧州連合では持続可能な都市づくりを目指し様々な施策が実施されている。本報告では、先進的な都市交通システムで知られているドイツ・カールスルーエ市の交通政策を事例とし、その現状と課題を明らかにする。カールスルーエ市では、持続可能な都市の発展をめざし、都心部のトランジットモール化を進めた。具体的な取り組みとして、自転車専用道の整備やトラムの郊外鉄道との乗り入れ、都心部の自動車道の地下化、緑化政策の一環としての軌道の緑地化があげられる。これらの取り組みにより、交通網の利便性向上とそれに伴う郊外からの集客が図られ、その効果としての中心市街地からの自動車排除が中心市街地の活性化、快適化に寄与していることがわかった。カールスルーエモデルは強力な交通ネットワークの形成を実現し、持続可

能な都市の発展に大いに貢献している。

◆ **Key words** : カールスルーエ市, トラム, トランジットモール

223 千葉県市原市における中山間地域等直接支払制度の展開—市原調査報告(1)—

宮坂 諒・難波高志・柴原智視(院・前期)・清水和明(院・後期)

2000年度より導入された中山間地域等直接支払制度(以下、直接支払制度)は、中山間地域をはじめとする条件不利地域における農業生産の維持と、耕作放棄地の抑制および利活用を目的としており、現在第3期対策が実施されている。本報告では、千葉県市原市における直接支払制度の実施の経緯を明らかにし、同制度が地域に与えた影響を考察する。千葉県で最も多くの耕作放棄地面積を抱える市原市は、2007年度より直接支払制度を導入しているが、同制度の適用を受けている集落は市内の5集落に留まっている。集落協定を締結した集落内では、交付金の対象となる農地で水稻の作付けが行われ、耕作放棄地の増加の抑制に一定の役割を果たしている。その一方で、農業従事者の高齢化が進み、交付金の対象外の農地では耕作放棄地が増加していることが明らかになった。

◆ **Key words** : 耕作放棄地, 中山間地域等直接支払制度, 市原市

224 中山間地域における農業体験学習が地域に与える影響—市原調査報告(2)—

宇賀村芳太郎・笹本裕大・藤井 太・石神亜沙子・藤田 要(院・前期)

わが国の農業は、農業従事者の高齢化、後継者不足などの多数の課題を抱えている。これらの課題は農業だけにとどまらず、地域社会における様々な問題の要因とされる。そうした中、政府は2000年制定の中山間地域等直接支払制度の適用による交付要件に農業体験学習を含めた。さらに2001年には学習指導要領を改正し、2005年に食

育基本法を成立させるなど、学校教育において農業体験学習を導入する動きに積極性をみせている。そこで、同制度が適用されている千葉県市原市徳氏集落における里見小学校の農業体験学習が地域に与える影響を学校教育と地域社会の各面から明らかにする。同小学校では、1996年からもち米の農業体験学習を導入している。児童らは農業への親しみや地域への愛着を持つなど、一定の学習効果がみられた。また、地域社会では学校の実習田が地域住民の交流の場として機能していることがわかった。一方で、学習により農業を嫌になる児童がおり、課題も残されている。

◆ **Key words** : 農業体験学習, 中山間地域, 市原市

225 千葉県市原市徳氏集落における耕作放棄地の植生分布と地形環境—市原調査報告(3)—

比企祐介・荒堀智彦(院・前期)・梶山貴弘・田代 崇(院・後期)

耕作放棄後の水田には、地形・水文・土壌環境などの違いによって、異なる植生分布がみられる。そこで、本研究は、中山間地である千葉県市原市徳氏集落において、耕作放棄地の植生について調査し、地形との関係を考察した。現地調査では、耕作放棄地の特定、植生の区分および放棄年代の聞き取りを行った。その結果、耕作放棄地面積の合計は49,609 m²で、これらは、谷底部に位置する1970年代に放棄された水田と、段丘面上に位置する1990年代後半から2000年代に放棄された水田とにわけられた。1970年代の放棄地では、ヨシ属(*Phragmites communis* Trin.)などの草本以外に、木本類の侵入が認められた。1990年代後半から2000年代の放棄地は、段丘面上の尾根部にセイタカアワダチソウ(*Solidago altissima* L.)などの乾燥に強い多年性草本類が、谷部にヨシ属などの湿地性の多年性草本類が多く分布していた。これらの分布の違いは、地形環境の差異によって、水分条件および土性が異なるためと考えられる。

◆ **Key words** : 耕作放棄地, 植生分布, 地形環境

226 房総半島溪流部, 泥岩河床における遷急区間の形成要因

前田拓志 (学部4年)

山地上流部を流れる河川には, 変化に富んだ岩盤河床形態が観察できる。河床に岩盤が露出し, 段差や遷急点などが形成され, 不規則な縦断面形を呈していることが多い。このような河床の縦断面形の変化は, 硬岩や節理などの存在によって制約されることなど, 定性的な指摘がなされており, 近年ではその形態的特徴を岩石物性などの定量的な面から説明する試みがなされている。そこで, 本研究では房総半島を流れる小櫃川支流の四朗治沢において, 泥岩からなる河床の岩盤物性・節理密度と侵食量の関係を調べた。その結果, 対象区間における岩盤物性に大きな違いはないが, 節理密度は遷急区間に大きいことがわかった。しかし, 対象区間の4ヶ所に設置した, エロージョンメーターによる4カ月間の侵食量(0.5~2.5mm)に違いは認められなかった。これらから, 遷急区間の形成には節理密度がかかわっていることが推察された。

◆ **Key words** : 泥岩, 河床形態, 侵食量

227 樹種の違いに伴う気温偏差傾向の特徴について

久保壮司 (院・前期)

樹木によるヒートアイランド現象の緩和効果が, 多くの研究から明らかにされている。樹木被覆は樹冠の広がりによる日中の日陰効果や夜間の放射冷却抑制効果をもたらす, さらに葉面からの蒸散を通じて大気を冷却すると考えられている。本発表では樹木がもつ形態的・生理的特徴により生じると考えられる気温変化を明らかにするため, 気温観測と各観測地点における天空率・地表面温度の観測を行い, 併せて観測領域での樹木調査を実施した。気温観測から得られた各地点10

時刻における気温空間偏差を算出し, 季節及び日変化の中に現れる偏差の傾向を整理するために96地点のデータに対し主成分分析を行った。各主成分から抽出された気温偏差パターンと土地被覆, 樹木調査結果, 天空率, 地表面温度などとの関係を解析し, 樹種の違いによる気温偏差の差異について考察した。

◆ **Key words** : 気温偏差, 樹木, 主成分分析

228 カラコラム山脈・フンザ川流域の氷河台帳および氷河分布図の作成

梶山貴弘 (院・後期)・藁谷哲也 (文理学部)

氷河台帳とは, 氷河の形態的特徴をまとめた一覧表である。長大な氷河が発達するカラコラム山脈・フンザ川流域の氷河台帳は, 2005年に作成された。本研究では, 衛星画像(2009・2010年取得, ALOS・ASTER)およびDEM(GDEM)の判読を行って, 既存の台帳に項目を追加し, さらに詳細な氷河台帳および氷河分布図を作成した。その結果, フンザ川流域には, 766の氷河(面積3,983km²)が認められ, 氷河の長さは, 0.3~58.8kmの間であった。長さ1km以上の氷河(604氷河)についてみると, フンザ川上流域に氷河末端部で岩屑被覆のないC型氷河(443氷河)が, 中・下流域に岩屑被覆のあるD型氷河(161氷河)が多く分布することが認められた。一方, 1km以下の氷河(162氷河)は, 流域全体に分布し, それらのほとんどがC型氷河(143氷河)であった。これらの分布の違いは, 流域内における山稜高度の偏った分布に依存していると考えられる。

◆ **Key words** : 氷河台帳, 氷河分布, カラコラム山脈

229 フィリピン・ルソン島中央平原パイタン湖における湖底堆積物の粒度変動

田代 崇 (院・後期)

西部熱帯太平洋島嶼域における完新世以降の環境復元を目的として, フィリピン・ルソン島中央平原パイタン湖において採取した湖底堆積物の粒

度分析をおこなった。分析結果より本試料中における堆積物のほとんどが100 μ m以下のシルト・粘土で構成されており、14C年代測定値より算出した堆積速度から本試料中における250 μ m以上の粗い粒径の高頻出層位は1,962から2,410yrBP間であった。また、粗い粒径の高頻出層位において有機物含有量が高い値を示す傾向にあることから、降水量の増加と共に植物生産量の増加が起こったものと推測される。本発表では、この結果から推測される古降水量と先行研究により復元された植生変遷史との対応関係について考察をおこなう。

◆ **Key words** : 湖底堆積物, 粒度変動, 堆積速度

230 アンコール・ワット第一回廊を構成する砂岩柱の強度分布

比企祐介・松田 辰(院・前期)・
羽田麻美・藁谷哲也(文理学部)

アンコール・ワットの第一回廊は内柱, 外柱合わせて332本の砂岩柱(幅30~40cm, 高さ190~220cm)によって支えられている。しかし、とくに内柱の下部は、乾湿風化の影響により深さの異なるノッチ状の凹みが形成されている。そこで本研究では、凹みの形成された内柱の強度を明らかにするため、エコーチップ硬さ試験機を用いて、内柱204本中54本の反発強度(L)を測定した。測定は内柱の内側・外側につくられた、それぞれ凹みの最奥部、回廊の床面から高さ80cm, 125cmの6箇所、回廊全体で324箇所である。その結果Lの平均値は、柱の最奥部が高さ80cm, 125cmより低く、とくに柱内側の最奥部が外側のそれより低いことがわかった。また、最奥部のLを回廊の向きごとに比較すると、外側のLは南・東向き回廊が北・西向き回廊に比べて低かった。一方、内側のLは北向き回廊が他の回廊より低いことがわかった。これらは、柱の置かれた風化環境の違いの影響を反映していると推察される。

◆ **Key words** : 反発強度, 風化環境, アンコール・ワット

231 アンコール遺跡群における植物根茎の破壊作用の評価—タ・プローム寺院における樹木分布について—

松田 辰・比企祐介(院・前期)・
羽田麻美・藁谷哲也(文理学部)

カンボジア, アンコール遺跡群のタ・プローム寺院では、遺跡を構築する岩石ブロックを覆うように、植物根茎が密に繁茂し、遺跡の破壊が起きているとされる。このような根茎成長による岩石の破壊作用はルートウェッジングと呼ばれ、物理的風化作用の一つである。しかしルートウェッジングに関する報告は少なく、その詳細はよくわかっていない。そこでタ・プローム寺院に見られるルートウェッジングを一つの事例として、その具体的プロセスを明らかにすることを考えた。特に樹木の分布と特徴(樹種・樹高・直径)について調査した結果、第三周壁内では141本、30種以上の樹木が生育することがわかった。全樹木の平均値は、樹高が22m, 直径は100cmと大きい。最も多い樹種のTetrameles udifloraの平均値は、樹高が24.3m, 直径が159.4cmと全体の平均値より特に大きく、40mを超える巨木もある。この樹木は寺院回廊内に多く分布する傾向が見られ、遺跡の破壊に関わっていると推察された。

◆ **Key words** : ルートウェッジング, 世界遺産, カンボジア

232 アンコールワット寺院の気象観測ステーションから得られた気象要素の変化と石材の劣化に与える影響

藁谷哲也・森島 済・羽田麻美(文理学部)

アンコール遺跡では、年周期および日周期の乾湿変動が繰り返され、石材の劣化が進行している。とくに、主要石材の砂岩とラテライトは、このような乾湿変動に対する抵抗性が低い。そこで本研究では、石材の劣化と気候環境の関係を検討するため、アンコールワットに気象観測ステーションを設置し、主要な気候要素(気温, 湿度, 降水量, 風向・風速, 日射量)の通年観測を2010

年12月から開始した。2011年1月1日～8月23日までの連続的な初期観測値によると、最高気温36.5℃(3月20日)、最低気温15.8℃(1月17日)で約20℃の較差が生じていた。また、日最低気温の変化は、1～2月にかけて、日最高気温のそれに比べて大きいことがわかった。日降水量は、最大値が4月8日の72.5mmであったが、6月以降から頻度の増加が認められた。また、風向は1～5月にかけて南東、6月以降は南西～西南西を示し、北からの成分はほとんど観測されなかった。

◆ **Key words**: カンボジア, 気象観測, アンコールワット

233 月ごとの平均気温と昼の長さを用いた可能蒸発散量の推定

沼尻 治樹 (社団法人日本測量協会 測量技術センター)

野上道男 (文理学部・非)

ソーンズウェイト法による月可能蒸発散量の年合計値と年積算気温とに高い相関があることは、これまでの研究によって明らかになっている。沼尻(2007)では、月平均気温と月可能蒸発散量との関係を、月単位で分析し、月平均気温と月平均気温0℃以上の年積算値によって月可能蒸発散量を算出する推定式を求めた。その研究では、月可能蒸発散量を月平均気温と年積算気温だけで推定できるという簡便性を得ることができたが、複雑な係数の算出を行わなければならないなどの短所があった。本研究では、月ごとの平均気温を用いて月可能蒸発散量を算出する手法を開発することを目的とする。月ごとのソーンズウェイト法による可能蒸発散量と平均気温、昼の長さについて重回帰分析を行い、回帰式を求めた。さらに、回帰式より推定した月可能蒸発散量とソーンズウェイト法による月可能蒸発散量との関係について考察した。

◆ **Key words**: ソーンズウェイト法, 可能蒸発散量, 重回帰分析

234 古代の測量術について

野上道男 (文理学部・非)

魏志倭人伝や古事記における山立て(海)・国見み(陸)について、新しい見知を述べたい。基本は「真来通る線」と「真来向かう線」である。前者は前方の2つの地標が一直線上に重なって見える場合であり、後者は前後2つの地標を結ぶ線上に居る場合である。吉祥とされる都市の立地探しに用いられた。この見通し測量には武具から転化された銚が用いられ、銚立ての祭事として現代まで残っている。この測量術は物部氏や渡部氏・大友氏などの秘技とされていたらしく、文献には出てこない。卑弥呼や魏志の著者陳寿の同時代人に裴秀(PeiXiu)がいる。彼は中国のプトレマイオスと称される地理屋である。規則正しい整数による位置情報: ラスタ型地理情報利用の祖である。絹布の経糸(よこ)と緯糸(たて)を用いて、直角三角形を構成し、相似直角三角形を使用して距離の測定などを行っていたらしい。そして、東夷伝にはピタゴラスの定理を用いて計算された距離値がある。

◆ **Key words**: 測量術, 古代, 山立て

P01 京滋地方における観光—産業近代化遺産と歴史的景観の活用例—

大久保勇樹・片山美穂・笹谷直人・佐藤秀平・

若林宏輔(学部2年)

京滋地方は、産業近代化遺産や歴史的景観を活用した観光が盛んなところである。そこで本研究では、その代表として、琵琶湖疏水・彦根城と城下町・大津市の町屋を活用した観光の特色について考察した。その結果、①琵琶湖疏水は1885年に水力を用いた工業・舟運の発展を目的に着工されたこと、②疏水は、水道用水の他、発電、舟運等多目的かつ効率的な利用が行われていること、③割合としては水道用水が最も多いこと、④現在は哲学の道・水路閣等を代表とする観光利用も行われていること、⑤疏水の観光整備は行われているが、案内板や地図などに不十分な点が多いこ

と、⑥大津市では旧東海道沿いの町屋等の歴史的建造物や、既存の施設を活かした観光開発が行われていること、⑦彦根市は彦根城築城400年祭の成功を機に、彦根城・佐和山城跡を中心に城下町を前面に出した観光地化が官民一体となって進められていること等が明らかになった。

◆ **Key words** : 琵琶湖疏水, 観光, 歴史的景観

P02 京滋地方の文化一街並み・町家・祇園祭・味噌を事例として一

伊藤みなみ・内田良平・金子直子・田茂山慧・西川祐樹・藤田美沙 (学部2年)

京滋地方は、長い歴史の中で培われてきた、街並み・町家・町衆文化・食文化などの伝統的建造物、文化の存続する地域として知られている。そのことから、今回の報告では、京滋地方の坂本伝統的建造物群保存地区・京町家・祇園祭・味噌醸造業を事例に、存続状況について考察した。その結果、①大津市坂本は、平安時代に延暦寺、日吉大社の門前町として形成され、昭和58年に重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、現在に至るまで歴史的景観が保護されていること、②京町家とは1950年以前に建築された伝統的木造軸組構法によって建築された木造家屋のことを指し、現在、住宅や店舗等多様な利用形態が見られること、③祇園祭は、住民に強い誇りや帰属意識と団結を促す半面、後継者不足を抱えていること、④白味噌は、平安時代に起源を持ち、天皇家と深く関わりながら発展し、現在は京都市内で最も多く生産され、全国に出荷されていること等が判明した。

◆ **Key words** : 京滋地方, 伝統文化, 歴史的景観

P03 高島市マキノ地区における観光業の展開とその特色

黒木ゆう子・泊 苑佳・堀 光順 (学部2年)

高島市マキノ地区は、自然を活用した観光業の行われてきたところである。そこで本研究では当

該地区における観光業の展開とその特色について考察した。その結果、①まず冬季積雪をみる気候を活用して昭和初期に関西三大老舗スキー場の一つとしてマキノスキー場が建設されたこと、②次に1970年以降鉄道や道路の整備が進みスキー場を核として農業公園や湖水浴場等の観光施設が建設され旧マキノ町全域がリゾート地化したこと、③これを受けてスキー客を顧客とする農家による民宿経営が始まったこと、④しかし、近年の交通アクセシビリティの進展にともない日帰り客が増加したこと、⑤観光需要変化にともなう入込み客数の減少もあって民宿経営は衰退化に転じたこと、⑥そこで現代はスキー観光から地元の自然や文化を活用したエコツーリズムに転換し、通年型の観光地として存続を目指していること等が判明した。

◆ **Key words** : 観光, 民宿村, 高島市マキノ町

P04 高島市針江地区における川端利用の特色とその保存形態

金敷直弥・出口療平 (学部2年)

滋賀県高島市針江地区は、川端と密接に結びついた生活が営まれている地域として知られている。そこで今回の報告では、川端と人々の生活とのかかわり、および保全に向けた取り組みについて考察した。その結果、①川端とは各家々に水が湧き出す場所であること、②古くから生活用水、魚の畜養に利用されており、住民は現在でもその水を利用していること、③水道の普及により減少傾向にあったが、2004年にNHKで紹介されたことを境にその価値が見直され、住民の間で川端に対する理解が進んできたこと、④見学者の増加に対応し、地元住民による針江地区のガイドツアーが実施され、地域コミュニティの活性化や、地区特有の「川端文化」の継承に結びついたこと、⑤針江地区のガイドツアーによる収益金は水に恵まれない海外の人々に対する救済にあてられていること等が判明した。

◆ **Key words** : 針江, 川端, 湧水

P05 時代祭の成立展開と運営の特色

荷見光太郎 (学部2年)

平安神宮で毎年10月に行われる時代祭は、京都を代表する祭として有名である。そこで、時代祭の成立・展開と運営の特色を考察した。その結果、①時代祭は明治維新の東京遷都による京都の人口減少の復興のため、市民の創意で神宮を建立して以来、平安時代から明治維新までの服装を再現し、動く博物館として文化の伝承を目的に始まったこと、②文献等を参考に時代考証を行い忠実に再現していること、③市民が中心となって行われる祭典であり、運営資金は市民の平安講社11社への寄付から捻出していること、④祭典の名誉奉行は府知事・市長・市議会正副会長・商工会議所会頭・時代祭協賛会長が勤めていること、⑤行列は京都に上洛する様子を再現し、明治維新から平安時代へと遡る倒叙法で構成され、当初は6列であったが現在は20列でおよそ2,000名の大行列に拡大していること等が判明した。

◆ **Key words** : 時代祭, 平安神宮, 平安講社

P06 滋賀県信楽における窯業の展開過程

木村篤史 (学部2年)

信楽における窯業の起源は、瀬戸焼・備前焼等とともに日本六古窯の一つとして数えられている信楽焼である。そこで、信楽における窯業の展開過程について考察した。その結果、①信楽焼は、飛鳥時代に朝鮮半島からの技術伝播により始まったこと、②安土・桃山時代、「茶陶信楽」として文化人に親しまれたこと、③信楽は中世末期頃に陶磁器産地として形成をみたこと、④江戸時代には日用雑器の生産を主体とし、幕府献上品を作っていたこと、⑤明治時代に、新しく開発された技術を背景に全国的産地として本格的な発展を遂げたこと、⑥昭和時代の高度経済成長期に生活様式の変化を受けて衰退したこと、⑦その対策として、新技術を導入し次々と植木鉢・傘立て等多様な製品を手がけ、一定の成果を上げたこと、⑧その結果、現在では傘立てをはじめとして生活に根

付いた様々な製品が生産され、後継者も増加傾向にあること等が明らかになった。

◆ **Key words** : 伝統工芸品, 信楽, 窯業

P07 琵琶湖における外来魚の漁業被害とその対策

福田 純・三浦素彦・皆川雄飛 (学部2年)

琵琶湖は、日本最大の面積をかかえ、古くから漁業が発達していた。しかし近年、外来魚の増加に伴う漁業被害が大きな問題となっている。そこで今回の研究では、外来魚増加に伴う影響とその対策について考察した。その結果、①琵琶湖は1965年にブルーギル、1974年にオオクチバス等の肉食外来魚の生息が確認されたこと、②その後双方とも大増殖し琵琶湖の生態系を崩し、漁獲量の減少の要因となっていること、③滋賀県は、外来魚を駆除するため外来魚の扱いに関する条例を施行し、外来魚回収ボックスの設置、漁業者からの外来魚の買い上げ、外来魚の稚魚段階での捕獲等の事業を実施していること、④これらの対策によって増殖の抑制や、大型の個体の減少等の一定の成果が現れていること、⑤琵琶湖の外来魚対策は行政だけでなく、漁協や市民の協力を得て進められていること等が明らかになった。

◆ **Key words** : 琵琶湖, 外来魚, 内水面漁業

P08 ハンザ都市の形成と都市機能・景観の特徴

平塚直史・井田琢麻・鯨井あずさ・小谷郁恵・

鳥海聖仁・堀 光順 (学部2年)・

堀内大介 (学部1年)

ハンザ都市は、中世後期に北ドイツの都市を中心に結ばれたハンザ同盟に加盟していた都市である。それらの都市の立地条件や歴史的背景、また景観や都市施設の立地から、各都市の特徴について比較・分析を行う。研究対象とする都市は、リューベック、ハンブルク、ヴィスマルの3都市とする。リューベックは運河に囲まれたハンザ同盟の中心都市であり、数多くの中世建築が残されている。ヴィスマルは同盟の初期から参加する港

町であり、バルト海諸国に輸送ができる好立地から、ハンザ同盟に繁栄をもたらした。また、高度な造船技術からハンザ時代を通じてリューベック等の主要都市とバルト海諸国を結ぶ重要な役割を担っていた。ハンブルクはハンザ時代には商業の要所として、リューベックとドイツ西方地域を結ぶ重要な拠点となっていた。そして同盟の衰退後には大きく経済発展し、現在は新市街地が広がっている。

◆ **Key words** : ハンザ同盟, 都市景観, 都市機能

P09 西ヨーロッパにおける食文化の形成と地域性

諸岡宏昭・木村篤史・金子直子・橋爪美菜・藤田美沙(学部2年)・村松 貴(学部1年)・石川亮介(史学3年)

西ヨーロッパにおける食文化の形成と現状について、酒類(ワイン・ビール)、お菓子(チョコレート・マジパン)、郷土料理(値段・歴史・材料)の3種類から報告する。そして、ドイツ、オランダ、フランスおよび各国内の地域間の特徴について比較する。ドイツの郷土料理は、その土地での食材に恵まれていなかった歴史があったため、保存食が中心となっていた。また、お菓子や酒類には気候にあったリングなどを使ったものが多い。オランダでは、調理方法が簡単な料理やお菓子類が多かった。オランダの酒類では、ビールが圧倒的に多く値段が非常に安価で種類も豊富であった。フランスでは、他の国と比較して宗教や生活行事などに関連した料理やお菓子がみられ、その種類も豊富であった。酒類は主にワインが主流で、販売されているものは自国産がほとんどであった。

◆ **Key words** : 食文化, 地域差, 風土

P10 西ヨーロッパにおける生活・文化の特徴

中島啓志(学部1年)・井島 健(心理1年)・大山英栄(体育3年)・高野清香・中島清香・中村早織・藪原麻理子(史学3年)

西ヨーロッパの中でも、ドイツ、オランダ、ベルギーおよびフランスにおける生活・文化の特徴を明らかにするために、宗教・民族、音楽、出版、スポーツの観点から現地において調査を行った。報告では、各国間およびその国内における地域差について検討するとともに、日本との比較も行う。宗教・民族では西欧のムスリム移民とモスクおよび教会の成り立ちと生活との関連、音楽ではストリートミュージシャンなどからみたヨーロッパ人の日常における音楽の存在、出版ではヨーロッパ各地域における本屋の立地及び書籍の差異、新聞等の取扱い、スポーツではサッカーなどのスポーツが人々の生活に及ぼす影響に注目した。調査の結果、ヨーロッパ人のアイデンティティは宗教を中心に成り立っており、生活の様々な場面には宗教を含む生活習慣などの文化的背景が日本よりも色濃く反映されていることが明らかとなった。

◆ **Key words** : 西ヨーロッパ, 生活, 宗教

P11 高山市の「古い町並み」における建造物の外観と利用の実態

木村尚樹・石 歳・田中美帆・宮川峻弘・森田このみ・阿部勝久・奥津友香理・久保田貴大・高山裕次・武本直樹・立見政人・角田暁洋・西川大貴・福田千咲(学部3年)・笹本裕大(院・前期)・中田昭一郎・落合康浩(文理学部)

高山市の市街地のうち宮川右岸に広がる街区は、江戸時代にさかのぼる古い商家の家並みや風情がよく保存されており、なかでもその主要部分は「重要伝統的建造物群保存地区」および「景観保存区域」に選定されている。今回はこの地区における建造物の外観にみられる特徴やそれらの利

用実態を現地調査の結果にもとづいて整理し報告する。宮川右岸の街区は、中央を東西に横切る国道158号（安川通り）を境として、南側の上町と北側の下町に分けられる。上町の重伝建地区である「三町」は、造り酒屋など古い店構えの家並みが連続する統一感のある景観がとりわけ美しい地区であり、観光客も多く訪れるようになったため、地区内の建物の多くが土産物店や飲食店などに利用されている。一方、下町の重伝建地区である「下二之町大新町」にも古い町並みはみられるが、相対的に店舗としての利用は少なく、住居としての利用が多い生活感のある町となっている。

◆ **Key words** : 高山市, 重要伝統的建造物群保存地区, 景観